

編集後記

『彦根論叢』の言葉

阿部安成

Yasunari Abe

『彦根論叢』編集委員長

十進法に馴染んでしまうとわたしたちはつい、71周年とか72周年とかいった記念の仕方に頓着せず、その大元の出来事について考えをめぐらせることを休んでよいかのような、どこか緊張が弛んだときを過ごせるのだと錯覚するのかもしれない。2年まえにわたしは、本誌編集委員長に就任して1か月半ほどを経たところで、その前年に編集方針が決まっていた本誌の特集号（第406号、2015年冬号）に「編集後記」を書くこととした。それは「戦後70年」をめぐる特集の体をとった本誌への、わだかまりといえるような心情を開いてみせた文章だったとおもう。そうなった理由はとてもかんたんで、その号では10年ごとという広く受け入れられるであろう大きな区切りをきっかけとして特集が組まれたものの、そこでの過去や歴史を振り返る、その姿勢をみずから省みる深度が気になったからだった。あれから2年を経ようとしている。

昨2016年末にわたしは、『週刊読書人』（第3170号）の「二〇一六年回顧総特集」の「日本史／近代以降」欄に寄せた文章で、石牟礼道子『苦海浄土 全三部』（藤原書店）、出原均ほか編『1945±5年』（兵庫県立美術館、広島市現代美術館）、高山真『＜被爆者＞になる—変容するわたし—のライフストーリー・インタビュー』（せりか書房）、福嶋聡『書店と民主主義—言論のアリーナのために』（人文書院）など18冊の本をとりあげて、「過去が積み重なってゆく現代史の相貌」と、それらを表現する本が積み重なって図書館や本屋に蓄えられてゆくようすと、そうした積み重なりをとおして政治が議論されている現在とを記録した。そこでは、積み重なる、というありさまを思索の基軸にすえてみた。

2か月3か月、5年6年、60年71年と時間の積み重なりを記録したいくつものドキュメンタリが2016年に放送された——NHKスペシャル「被爆の森 原発事故5年目の記録」（NHK総合、3月6日）、BS1スペシャル「定点映像 震災5年の記録」前編後編（NHKBS1、3月20日）、ハートネットTV「被害者が伝える地下鉄サリン事件 映画監督・阪原淳」（NHKEテレ、3月23日）、テレメンタリー2016「1827日 定点撮影1135カットが綴る被災地の記録 “3.11”を忘れない63」（ABC、4月10日）、NNNドキュメント'16「生きる伝える “水俣の子”の60年」（読売、5月2日）、NEXT未来のために「熊本地震2か月 癒えない心の傷 密着 日赤こころのケアチーム」（NHK総合、6月11日）、ドキュメンタリー映像'16「自衛官とその家族 戦後71年目の夏に」（毎日、8月1日）、ハートネットTV「シリーズ戦後71年 忘れられない、雨 認知症と沖縄戦の記憶」（NHKEテレ、8月15日）、ドキュメンタリー映像'16「誰が遺骨を帰すのか 玉砕の島サイパン・72年目の夏」（毎日、8月29日）——向こう側へと追いやられ忘れられようとする出来事を、しっかりとこちら側に手繰り寄せて、それらの映像を人びとの網膜と脳裏へと焼きつけようとする作り手の意図がはっきりとわかる作品がいくつもあった。

健忘というときの健は、よく、非常に、したたか、との意味のようだが、忘れるということはまた、すこやかさのあらわれでもある。どうやら歴史とは、忘れなければよい、という過去をめぐる情報なのでは

なく、過去にどう向き合うのか、その身構えをわたしたちに問うている知のありようをいうのだろう。ただ忘れなければよい、けして忘れてはならないという指示ではなく、覚えているのであれば、それはどのように、覚えようとするのならそれはなにを見通してのことなのか、それらをしかと考えよと、歴史という知はわたしたちに詰め寄っているのだ。

この2017年にも忘れられない映像ドキュメンタリがあった——ドキュメンタリー映像'17「沖縄 さまよう木霊 基地反対運動の素顔」(毎日、1月30日)、クローズアップ現代+「震災6年 埋もれていた子どもたちの声 “原発避難いじめ”の実態」(NHK総合、3月8日)、ETV特集「“原爆スラム”と呼ばれた街で」(NHKEテレ、6月10日)、ETV特集「原爆と沈黙 長崎浦上の受難」(NHKEテレ、8月12日)、目撃! にっぽん「ただぬくもりが欲しかった 戦災孤児たちの戦後史」(NHK総合、8月13日)、NNNドキュメント'17「放射能とトモダチ作戦 米空母ロナルドレーガンで何が?」(読売、10月9日)、BS1スペシャル「サハリン残留 家族の歳月」(NHKBS1、10月15日)、NNNドキュメント'17「私を見て ミナマタから世界へ 魂の叫び」(読売、10月30日)——わたしたちは、ある出来事を長期にわたって考え続けられるか、そうした構えを持続できるかが、その性根において問われている。

そしてもうひとつ、わたしたちにみちななテレビジョンをとおしたドキュメンタリーは、なにをとりあげなかったのかを確かめなくてはならない。日本の戦時の性暴力や虐殺は、まずテレビ・ドキュメンタリーにはならない。放送されたとしてもそれは「世界のドキュメンタリー」でしかなかった(たとえば「シリーズ ボスニア戦争 終結から20年 故郷の村で…」NHKBS1、2015年10月6日、同「民族浄化”を弁護した男」同、同年10月7日、シリーズ・リアルサウンドが伝える世界「殺人者34万人の帰郷 ルワンダ虐殺22年目」NHKBS1、2017年1月19日。非戦時であれば、ETV特集「関東大震災と朝鮮人 悲劇はなぜ起きたのか」NHKEテレ、2016年9月3日、報道特集「朝鮮人虐殺 追悼文はなく…」毎日、2017年9月2日、が稀有な例)。

2年まえからいまのわたしたちに向けられたいわば宿題を、ひとつとりあげよう。2015年7月25日に初版が発行された『「歴史認識」とは何か—対立

の構図を超えて』(大沼保昭ほか、中公新書)は、1か月あまりで3版がだされる著作となった。刊行から2年が過ぎたいま同書は、過去から現在へとつながる時間と場所と人びとをめぐる知としての歴史を考えるときの、その歴史という知におけるわたし(たち)についてのひとつの測位装置(positioning system)となるとわたしはおもう。

同書による大沼の主張は、ごくかんたんかというと、歴史は「歴史認識」と組み合わせるべきであり、また、「歴史認識」はひとつではなく多様だ、ということ。それはまた、「自らを辱める」ことなく、また卑屈にならずに、きちんと他者の意思と尊厳とを尊重できるかという歴史をめぐる態度につながるることとなるはずだ。

たとえば、いわゆる東京裁判(極東国際軍事裁判 International Military Tribunal for the Far East)についての議論にもその歴史があり、1980年代に「東京裁判史観」批判」が登場し、1990年代には「東京裁判に対するバッシング」が強まってきたという。だが大沼によると「この時期に出てきた東京裁判批判論は、すでに東京裁判の弁護団がいつていること、あるいはその直後にいわれたことと、ほとんど変わらない」とのことだ。もちろん、過去の出来事にかかわる誤りや過ちをくりかえし指摘する必要はある。ただそれがたんに、わが国を誇り、わが身に満足と安心とを充填させる榮譽を祝福するにとどまれば、卑小なわれ(ら)が姿態を露わにする脱衣とみえてしまう。慎むことと、みづからを卑しめたり辱めたりすることとは違う。歴史を自己のアイデンティティの中核に、より深く、より重く、より固くすえようとする、それは裏返って、心理代償(compensation)としてわたし(たち)の怯懦を露見させるだけとなるのかもしれない(安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店、1992年)。

歴史には、時間と場所と、そして人びとによる、積み重なりがある。そこには1か月であれ100年であれ、長短にかかわらず積み重なった理がある。それをじっくりと考えてゆこうとの勧めが、「戦後70年」の2015年から現在へとおくられた宿題であり、もとよりそれは、2年まえにようやく提起されたことでもない。そしてこの課題にいまどう取り組んだのか、どういう解答を示せたのか、未来から問われることとなる。

(2017年11月22日)